

2008 年度／文学部自己点検・評価報告書

【1】文学部改組の経緯と目的

文学部は 2007 年度に改組転換を行い、従来の 5 学科を人間学科 1 学科とした。その趣旨は、名実ともに新時代に適合した「学生第一」の教学体制を築くことである。理念としては、創立者が示された「生命の尊厳の探求者たれ」「人類を結ぶ世界市民たれ」「人間主義の勝利の指導者たれ」を掲げている。学部の基本コンセプトとしては「創造的人間主義」がある。

これらの基本理念の下、具体的には以下の 5 点を基本方針とした。

- ① 1 学部 5 学科体制を改組転換し、1 学部 1 学科 7 専修とした。
- ② 学生募集（入試）は学部一括して行い、2 年次に専修を選択する制度を導入する。
- ③ 新しい時代に対応した基礎的能力の形成を重視する。1 年次に、必修科目として「基礎ゼミ」を設置し、演習形式の少人数授業のなかで大学での基本的な学びの力を養成する。さらに、「基礎ゼミ」を導入科目として、あわせて語学力や情報収集力、文章力、発表力などを強化していく。
- ④ 1 年次に学部共通専門科目を新たに設置する。これらの科目は各専修の内容を把握し、それぞれの基礎を学べる科目であり、本学部のめざす人間教育の基礎を幅広く学ぶ場であるとともに、将来の方向性を定めつつ、2 年次の専修選択のため判断材料を得られるようにする。
- ⑤ 各専修で修得しなければならない単位数を少なくし、学生の希望にそって、主専攻や副専攻の科目群、「多彩なプログラム」などを選択履修できる可能性を広げ、多様な学生の関心やニーズに応えることができるカリキュラムを編成する。

【2】1 年次科目の在り方

本年（2008）度末で改組より 2 年が経過することになる。1 年次に視野を広げ、また基礎力をつけ、2 年次から専修を選択するという制度は、現在の高校生の成熟度を考える時、必要な仕組みであるといえよう。

本学部では、1 年次前期の必修科目として「基礎ゼミ」と「人間学への招待」を設置した。「基礎ゼミ」は大学生としてのリテラシーを学ぶことを目的にしている。1 クラス当たりの学生数は 18 人前後で 24 のクラスを設けている。「人間学への招待」は、オムニバス方式で、講義担当者が自らの学問の視点から共通テーマについて語る科目で、創造的人間を共通のテーマに、各専修から担当教員が選出されている。この講義を通して、大学・学部の理念と専修の学問を認識することを期待している。

2 つの必修科目は、受講学生には概ね好評であり、基礎力の要請と視野の拡大という狙いは実現されていると言える。ただし、「基礎ゼミ」は担当教員による講義内容の違いが大きいという問題があり、担当者の打ち合わせや講義のための講習をさらに綿密に行う必要がある。また、「基礎ゼミ」には、新入生の相談に応じるという機能もあり、その機能をさらに充実させるため、来年度から各ゼミに S A を配置する予定である。各専修の入門科目にあたる科目の履修者も多く、幅広く学ばせようという目的を

果たしていると思われる。

【3】専修選択について

2年次からの専修選択にあたっては、可能な限り学生が希望する専修への進学ができるように配慮したが、専修の基幹科目である演習の開講のための制限があり、それぞれに募集定員を設けざるをえなかった。ただし、従来の5学科体制時のそれぞれの定員よりも募集定員を多くし、学生の希望にそえるようにした。

すでに2回の専修選択が行われたが、2回とも社会学専修と総合人間学専修の2専修に対して、定員を超えて希望があり、希望通りの専修へ進学できない学生が生じた。また、最終的に進学希望者が定員の半数を下回る専修もあった。今後の課題として、こうしたアンバランスへの対応をどのようにするのかということがあげられる。教員の専門分野を踏まえつつ、教育と学問の両面で魅力ある専修への編制替えを行うべく検討を進める予定である。

【4】「多彩なプログラム」「デュアルディグリー」

改組により、副専攻や「多彩なプログラム」といった、選択した専修以外の科目群を選択履修できる可能性を広げた。

副専攻は卒業時に認定されるもので、所属する専修を主専攻としたうえで、主専攻以外の一つの専修科目16単位以上修得した場合、自動的にその専修を副専攻とするものである。その中心科目である他専修の演習の登録が明春のため、副専攻の具体的な履修者数は掌握できていない。

なお、副専攻については、明年より全学的に副専攻制度が導入されるため、本学部も単位数や応募資格など全学部の制度に合わせることになった。

「多彩なプログラム」については、現在、2年次生のみが履修しており、履修者は合計137名である。それぞれの履修者数は、英語・通訳翻訳家プログラム26名、時事英語学習プログラム37名、メディアスキルプログラム18名、社会調査士プログラム15名、社会福祉プログラム17名、日本語教育（基礎）プログラム10名、古典語プログラム4名、現代中国研究プログラム4名、比較思想プログラム6名となっている。

それぞれのプログラムは、以下のような到達目標をもつものである。

(1) 英語・通訳翻訳家養成プログラム

到達目標：通訳ガイド試験、通検2級以上、翻訳実務検定TQE3級以上

(2) 時事英語学習プログラム

到達目標：TOEIC850点、英検準1級以上

(3) 社会福祉プログラム

到達目標：社会福祉制度の現状と問題点を幅広く研究

(4) メディアスキルプログラム

到達目標：コンピューター・ネットワーク技術を駆使して、情報収集・コミュニケーション能力・問題解決能力の習熟を図る。

(5) 社会調査士プログラム

到達目標：社会調査士資格の取得を目指す。

(6) 比較思想プログラム

到達目標：西洋・東洋・日本の諸思想を学び、哲学・思想論文を執筆する力をつける。

(7) 古典語プログラム

到達目標：サンスクリット語やラテン語などの古典語に親しみ、またその原典もある程度読めるようになること。

(8) 日本語教育（基礎）プログラム

到達目標：日本語教育に必要な基礎を体系的に学習する。

(9) 中国語資格取得プログラム

到達目標：HSK 6 級、中国語検定 2 級レベルを目指す

(10) 現代中国研究プログラム

到達目標：現代中国について多角的に研究

(11) ロシア語・通訳翻訳家養成プログラム

到達目標：東京ロシア語学院ロシア語検定 2 級レベル

また、北京語言大学との間でのデュアルディグリー・コースは派遣学生数が 10 名と限られているが、選抜試験受験のための登録学生数は 2007 年度が 28 名、2008 年度が 16 名となっている。2007 年度登録者のうち、10 名の学生が今春より北京語言大学で学んでいるが、北京語言大学に留学できなかった登録学生の多くが学内の派遣留学試験に合格し、明年より中国の交流校に 1 年間の留学に出ることになっている。デュアルディグリー・コースは概ね順調であり、成果も大きいと思われるので、今後より多くの学生が希望するよう、周知徹底に工夫が必要である。

デュアルディグリー・コースの学生の 4 年間の概要は以下の通りである。

- | | |
|--------------|-----------------------------------|
| 1 年次・4 月 | ガイダンスに参加し、学習相談(オリエンテーション)を行う。 |
| 1 年次・8 月 | 1 週間にわたる夏期中国語研修へ参加し、HSK4 級程度を目指す。 |
| 1 年次・9 月 | デュアルディグリー・コースの学生選抜試験を受ける。 |
| 1 年次・2 月 | 北京語言大学へ出発する。 |
| 2 年次 4 月～3 月 | 北京語言大学にて授業を受ける。 |
| 3 年次 4 月～1 月 | 北京語言大学にて授業を受ける。 |
| 4 年次 | 創価大学にて授業を受ける。 |

また、それぞれの学期で受講する科目は次の通りである。なお科目名の後ろのカッコ内は単位数である。

創価大学（1 年次）

基礎ゼミ（2），人間学への招待（2），中国語入門（2），中国語 A 1（1），中国語 B I（1），中国語初級 I（1），中国語会話初級 I（1），中国語会話初級 III（1），中国語会話中級 I（1），中国語会話中級 III（1），共通基礎演習 I（2），中国現代文学入門（2），中国語 A II（1），中国語 B II（1），中国語

初級Ⅱ（１）、中国語会話初級Ⅱ（１）、中国語会話初級Ⅳ（１）、中国語会話中級Ⅱ（１）、中国語会話中級Ⅳ（１）、共通基礎演習Ⅱ（２）

北京語言大学（１年次後期）

初級漢語総合課（１０）、初級漢語聴力課（４）、初級漢語閲読課（２）、初級漢語口語課（２）、漢語写作入門（２）

北京語言大学（２年次前期）

中級漢語総合課（６）、中級漢語聴力口語（４）、成語選講（２）、中国文化專題選読（２）、中級漢語閲読（２）、漢語写作基礎（２）、中国人文地理（２）

北京語言大学（２年次後期）

中級漢語総合課（６）、中級漢語聴力口語（４）、中級漢語閲読（２）、漢語写作基礎（２）、中国現代史（２）、報刊語言基礎（４）

北京語言大学（３年次前期）

文化選題討論（４）、中国文化史（２）、高級漢語総合課（６）、新聞聴力（２）、中国国情（２）、報刊閲読（４）

創価大学（４年次）

演習Ⅰ（２）、演習Ⅱ（２）、卒論研究Ⅰ（２）、共通総合演習Ⅰ（２）、共通総合演習Ⅱ（２）、共通総合演習Ⅲ（２）、演習Ⅲ（２）、演習Ⅳ（２）、卒業研究Ⅱ（４）

【５】「人材養成の達成度の把握（新カリキュラムの評価方法）」

文学部の人材養成の目的は以下のとおりである。

文学部は、「生命の尊厳の探求者たれ」「人類を結ぶ世界市民たれ」「人間主義の勝利の指導者たれ」との三指針を掲げ、言語、文学、哲学、歴史、社会など、広範な文化領域にわたる教育および研究を通して、真の教養を備えた「全体人間」「創造的人間」として、内外に活躍しうる人材を育成する。

文学部の人材養成の流れは、１年次に問題意識と基礎力を涵養し、２年次で主たる専攻を決め、３年次からの「演習」などにおける教員と学生の人間的な関係で知識と人格を練磨し、４年次の「卒業論文研究」で総仕上げをするというものである。

１年次の問題意識と基礎力については、「基礎ゼミ」と「人間学への招待」の評価を指標とする。４年間全体については、卒業論文や演習の評価、留学した学生の割合、卒業後の進路の動向を指標として検討する。